

7月18日 ローマの信徒への手紙 9章 18~28節 今日の説教から
説教題：「私たちに届く福音」

私たちキリスト教の教会は、伝道を行う際に「救い」というものを前面に押し出すことが多いと思います。それは、私たちが信仰に入ることによって救われたと感じていて、イエス様とつながることによって様々な意味の「救い」を感じているからだと思います。その中でも、終末についての話、裁きの時に救いへと導かれるために信仰が必要であることも、同じく私たちが救いを語るうえで欠かすことは出来ません。しかし、この救いの基準なのですが、イエス様以前のユダヤ教の文化の中では、「律法を守る人が救われる」と考えられていました。しかし、イエス様は従来のユダヤ教の信仰ではなく、より正しい信仰を人々に教えました。それは、「悔い改めてイエス様を信じる信仰」こそが必要なことだ、と私たちに教えてくれているのです。

今日の聖書箇所は、直前の「神様は私たち人間の行いに従って私たちを救う、救わないと定めているのではない」という言葉を受けて始まっています。ローマの信徒たちがおそらく感じているであろう、私たちが神様に従うことが出来ないのはそのように作った神様が悪いのではないか、という責任転嫁に対する応答が語られています。

ここで、パウロは旧約聖書から2つの箇所を引用することで、救いと信仰の関係がどのようなものなのかを示します。最初に25節で引用されているのはホセア書の2章1節の言葉で、神様が異邦人に対して「私の民ではない、私はお前たちの神ではない」と呼びかけながらも、いずれ「生ける神の子ら」と呼ばれるときが来る、つまり彼らが正しい信仰へと導かれるときが来ることが預言されました。続いて引用されているのはイザヤ書10章の言葉で、バビロン捕囚から帰ってくることが出来た人々、正しい信仰へと戻ることが出来た人々だけが救われる所以あり、アブラハム、イサク、ヤコブの子孫であることだけで救われる理由にはならない、という事が示されています。

これらの引用により、異邦人よりもむしろイスラエルの民、ユダヤ人の方が信仰の危機に立っていることが示されました。このようにユダヤ人と異邦人の間に生まれてしまった差について、パウロは今日の箇所の続きで「イスラエルは、信仰によってではなく、行いによって達せられるかのように、考えたから」とあると語っています。つまり、律法に従う事は救いの条件ではありませんでした。律法を守ることや神様の命令する正しい行いをするから私たちの信仰が正しいとされるのではなく、私たちが正しい信仰を保つことが出来ている場合に、私たちは自然と律法や神様の言葉に従うことが出来る、という結果がついてくるのです。私たちが神様を大切にするその時、私たちの行動は自然と神様を愛し、隣人を愛する行動へとつながっていくのです。

今日パウロが引用したホセア書のもう少し先、6章6節にはこのような神様の言葉が記されています。「私が望むのは犠牲ではなく、愛である。私が望むのは焼き尽くす捧げ物よりも、人が神を知ることである。」私たちに届く福音、私たちが救いに導かれているという福音を、私たちは神様に対する愛の業として、隣人に対する愛の業として、隣人と分かち合うことが出来ます。私たちは神様に強められて、それを自然に行うことが出来ます。その喜びの中で、今週一週間の、これから歩みを共に進めていきましょう。